

東南アジアの玄天上帝廟

二階堂 善 弘

On Temples of Xuantian Shangdi in the Southeast Asia

NIKAIDO Yoshihiro

This report introduced some temples of Xuantian Shangdi (玄天上帝) in the Southeast Asia. For example Den Quan Thanh (真武観) in Hanoi, Lao Pun Tao Kong Shrine (大本頭公廟) in Bangkok, Yue Hai Ching Temple (粵海清廟) in Singapore. And researched development of Xuantian Shangdi worship in the Southeast Asia.

キーワード：玄天上帝、真武観、粵海清廟

前 言

東南アジアの諸地域に祀られる華人廟の主神は、圧倒的に天后媽祖と関帝が多い。シンガポールでも有名な天福宮は媽祖廟であり、ホーチミンで知名度の高い天后宮も媽祖を祀るものである。バンコクの古い廟である七聖媽廟もやはり媽祖廟である。またバンコク・ホーチミン・クアラルンプールなどには大きな関帝廟があることが有名である¹⁾。

これは日本においても同様で、長崎の崇福寺と興福寺に像が残されているのは関帝と媽祖であるし、沖縄（琉球）にもこの両神を祀るところがあった²⁾。現在の横浜においても、中華系の廟として知られているのは関帝廟と媽祖廟である。華人廟といえまずは媽祖と関帝というのが、最もよく見られるパターンであると考えられる。

一方で真武大帝とも称される玄天上帝の廟も、関帝・媽祖には及ばないものの、東南アジアでは目立つ存在である。シンガポールの粵海清廟は玄天上帝と媽祖を併祀する廟で、古くからあるものとして知られている。またハノイにも規模の大きな玄天上帝廟である真武観がある。これら東南アジアの玄天上

1) 東南アジアの華人廟の研究については、古くは窪徳忠『道教とアジアの宗教文化』（『窪徳忠著作集』8巻・第一書房1999年）があり、新しいものでは坂出祥伸『道教と東南アジア華人社会』（東方書店2013年）がある。

2) これらについては筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部2012年）213～239頁を参照。

帝信仰については、李天錫氏や梅莉氏の専論がある³⁾。本論ではこれらの論をふまえつつ、また筆者の実見した様子も加え、東南アジアの玄天上帝について紹介し、その特色を分析したい⁴⁾。

1. ハノイ・ホーチミンの華人廟と玄天上帝

ベトナムの玄天上帝信仰について、梅莉氏は次のように述べている⁵⁾。

ベトナムにおいては、真武大帝（玄天上帝）の信仰は非常に盛んである。北部や中部においては数多くの真武大帝を祀る宮観や神祠が存在する。ベトナムの真武信仰は中国の広西から伝来したものである。広西は真武信仰の盛んなところであり、数多くの真武廟が建てられており、旧暦三月三日には真武大帝の生誕祭が行われる。清の沈自修『西粵記』には、「宣化（邕寧県）・武縁（武鳴県）之俗、三月三日、各村以烏米飯祀真武」という記載があり、『隆安県志』「地理考」には、「三月初三、北帝誕」とある。民国期の『貴県志』「風俗」には「三月三日有祀武当北帝与天后・龍母」という活動を記す。また『南寧府部匯考』には、来賓（即ち今の来賓県）について「最崇奉者為玄武神、号曰北極玄天上帝、省称曰北帝。県城北楼及良江・寺脚・大湾、三墟皆立廟專祀。歳值夏曆三月三日、輒賽会游神」という記載がある。近世のチワン族においては、三月三日には齋醮の祭りの場を設け、同時に演劇や歌舞によって保護神である真武大帝の祭祀を行う。広西の近隣であるベトナム北部においては、広西の影響を受け、特に広西からベトナムに至る途上において、数多くの真武廟が存在する。たとえば、ランソン省には鎮北真武祠があり、バクニン省トゥイロイには武当山真武祠があり、ソンコイ河東岸には巨靈真武祠があり、ハノイの西北には真武観がある。これらの真武を主神として祀る廟は一般に真武の塑像を設け、その像は北を向いていることが多い。ベトナムで最も古い真武廟は、ハノイの真武観である。北宋年間に建てられたとされ、また鎮武観と称する。もとはハノイ城内にあったのであるが、1472年に皇城が拡大されたのに伴い、タイ湖（西湖）の南岸に移築された。この廟は創建期よりベトナムの王たちに重視されており、降雨を祈願し、妖邪を退治するという目的のため、歴代の君主はしばしば真武観に赴いて玄天上帝の靈異を求めた。この廟は現在でも残っており、主要な建築は1893年に建てられたものである。大殿に祀られた真武の銅像は1677年に鑄造されたものである。座像で、披髪で身に鎧甲をまとい、左手に手印を結び、右手には蛇の絡まった宝剣を持っている。

ベトナム北部における代表的な真武廟はハノイの真武観（Den Quan Thanh）すなわち鎮武観（Tran

3) 李天錫「東南亞華僑華人玄天上帝信仰舉要」（『道韻』3集「玄武精蘊」）239～246頁、梅莉「台湾及东南亚地区的玄天上帝信仰——以武当山现存碑石、匾額为中心的考察」（『中国道教』中国道教協会2006年3期）37～39頁。

4) 玄天上帝については、筆者「玄天上帝考」（『明清期における武神と神仙の発展』関西大学出版部2009年）41～78頁参照。また筆者はエッセイとして「ハノイの真武と大阪の妙見」「バンコクの真武」（『アジア文化フォーラム』関西大学文学部アジア文化専修）創刊号・2号においても論じた。

5) 前掲梅莉「台湾及东南亚地区的玄天上帝信仰」38頁。

Vu Quan) である。これはタイ湖の南側に現存している。筆者は2012年12月に当廟を調査した。圧倒的であるのは、中心に祀られた4メートルに近い玄天上帝の銅像である。



ハノイ真武観の玄天上帝像

披髪に裸足、左手に手印、右手には七星剣を置く。大きな玄天上帝像としては、広東仏山の祖廟の玄天上帝像、台湾高雄左營の巨大な玄天上帝像などが知られているが、それらと並び、深い印象を与えるものである。



ハノイ真武観

以前にも簡単に紹介したが、この真武観をめぐるのは、かつて九尾の狐の妖怪が害をなしたために、玄天上帝がこれを退治したとの伝承が存在している⁶⁾。これは『嶺南摭怪』に見える話に基づいたもの⁷⁾。九尾の狐といえば、『封神演義』の妲己が想起されるが、玄天上帝が殷周の革命に関わったという話は、そもそも『三教搜神大全』に含まれる説話に見えるので、或いはこちらの方が古い伝

6) 「ハノイの真武と大阪の妙見」(『アジア文化フォーラム』関西大学文学部アジア文化専修) 創刊号2013年11頁。

7) 『嶺南摭怪』巻一「狐精伝」。

承であるかとも考えられる。

ベトナム南部においては、広西などからの直接の影響が少なくなるためか、他の東南アジア諸国と同じく、華人が渡った先で造った「会館」が廟として機能する場合が多い。

ホーチミンでは、チョロン地区にあるチャイナタウンが有名である。この地区では、それぞれ温陵会館 (Hoi Quan On Lang)・穗城会館 (Tue Thanh Hoi Quan)・瓊府会館 (Hoi Quan Quynh Phu) などが古くから存在する廟として知られている。筆者はこれらの廟について2013年12月に調査を行った。



ホーチミン穗城会館

温陵会館は福建系の廟で、媽祖を中心に関帝・文昌帝君・広沢尊王・包公・華光大帝などを祀る。穗城会館は広東系で、媽祖を主神とする。他に龍母娘娘や金花娘娘を祀る。瓊府会館は海南島系の廟で、やはり天后媽祖が主となる廟である。

やや意外だったのは、広東系の廟でも玄天上帝をあまり見なかったことである。大半の廟ではやはり媽祖と関帝という組み合わせが多かった。ただ、これはタイのバンコクに行くとかなり事情が変わってくる。

2. バンコクの玄天上帝廟

タイでは、バンコクのヤワラート通りとチャルンクルン通りに挟まれた地区に大きなチャイナタウンがあることが知られている。この一帯はヤワラート地区とも称され、潮州出身者で占められており、存在する中華料理店も潮州料理を主とする。当然ながらその信仰も潮州の信仰が移されたものである⁸⁾。筆者は2014年1月に当地の調査を行った。

ヤワラート地区で有名な廟は、華人廟で有名なものには、七聖媽廟 (サーンチャオ・チッシャマー)・龍蓮寺 (ワット・マンコン・カマラワート)・龍尾廟 (レン・ポアイ・イア)・大聖仏祖廟 (サンチャオ・ヘンチャー) などがある。またタイ風の寺院では、重さ5.5トンの黄金で作られた仏陀像がある黄金仏寺院 (ワット・トライミット) も存在する。このうち七聖媽廟は媽祖を主神とする。関帝古廟は当然なが

8) バンコク華人廟については、前掲坂出祥伸『道教と東南アジア華人社会』90～99頁に詳しい記載がある。



バンコク七聖媽廟内部

ら関帝が主祀となっている。大聖仏祖廟は、斉天大聖（孫悟空）を祀っている。

しかし一方で玄天上帝の信仰も強い。まずその名も玄天上帝廟は道光14年（1834）に創建されたものであるという。虎の像があり、また虎神廟とも呼ばれている⁹⁾。次に大本頭公廟がある。この廟は本頭公を祀る廟のほずであるが、その主神は玄天上帝である。筆者が訪れた時、数多くの参拝客が押すな押すなといった感じで熱心に拝礼を行っていた。



バンコク大本頭公廟



バンコク慈濟寺

9) 前掲坂出祥伸『道教と東南アジア華人社会』99頁。

またヤワラート地区にある慈濟寺では、中心になるのは観音はじめ仏菩薩であるが、脇侍として玄武山仏祖という神が祀られていた。玄武山は汕尾陸豊付近にある山で、元山寺という大きな寺院があることが知られている。玄武山において祀られているのは玄天上帝である。像は玄天上帝とはやや異なる姿ではあるが、一応玄天上帝に類するものと考えられる。

3. シンガポールの華人廟と玄天上帝

シンガポールのチャイナタウン付近の華人廟では、天福宮 (Thian Hock Keng)、仙祖宮 (Siang Cho Keong Temple)、保赤宮 (Po Chiak Keng Tan Si Chong Su)、鳳山寺 (Hong San See Temple) などがよく知られている。これらの廟については福建系のものが多い。天福宮は媽祖廟であり、また同時に様々な神々を祀る。仙祖宮は大伯公が主神である。保赤宮は開漳聖王、鳳山寺は広沢尊王という閩南の地方神を祀る。

マレーシアとシンガポールの玄天上帝廟について、梅莉氏は次のように述べている¹⁰⁾。

マレーシアにおいては、潮州の華僑会が玄天上帝廟である「老爺宮」を建造した。後にこれは潮州会館となる。今に至るまで百年の歴史を有している。清同治五年(1866年)には福建と広東出身の華僑が共同で資金を集め、スブランプライに福德祠を造った。主神は大伯公で、さらに保生大帝と玄天上帝がある。この廟は1882・1925・1964・1975・1985年の五次にわたって修理を行っている。シンガポールにおいては、広東潮州籍の華僑がシンガポールのフィリップ・ストリートに粵海清廟を建造した。この廟は左右二つの廟から成っている。左の廟は「天后宮」で、天后聖母媽祖を祀る。右の廟は「上帝宮」で、玄天上帝を祀る。廟の中には清の道光六年(1826年)の対聯が残っている。遅くとも道光六年には建造されていたことが、この資料から判明する。

粵海清廟 (Yue Hai Ching Temple) はシンガポール華人廟の中でも非常に古いものとして知られている。梅莉氏の指摘する通り、同じ大きさの媽祖廟と玄天上帝廟が対になる形で建てられている。こちらも潮州出身者によるものである。

李天錫氏は粵海清廟について次のように述べている¹¹⁾。

媽祖(すなわち天后聖母)は、現在では世に広く認められた地位の高い航海の女神である。ただマレーシアのスブランプライ福德祠においては、天后聖母(媽祖)は玄天上帝などの神々の脇に配置されている。恐らく当時は玄天上帝などの陪神であったと考えられる。しかしシンガポールの粵海清廟では、天后聖母と玄天上帝は左右の二つの廟に祀られており、それぞれに優劣はなく、主神と陪神の区別も存在しない。(略) 実は早期においては、人々は玄天上帝を海神として祀っていたので

10) 前掲梅莉「台湾及东南亚地区的玄天上帝信仰」37～38頁。

11) 前掲李天錫「東南亞華僑華人玄天上帝信仰舉要」244頁。



シンガポール粵海清廟の上帝宮

ある。そのため、比較的早い時期に伝来した玄天上帝は海神としての役割が大きかったと考えられる。清の光緒皇帝の御筆の額には「曙海祥雲」とあり、これは玄天上帝と媽祖を共に海神として讃えたために書かれた文言であると考えられる。マレーシアの福德祠、シンガポールの粵海清廟の媽祖と玄天上帝を祀る状況から推測するに、天后の地位が上がる前には、媽祖は玄天上帝など他の海神の陪神であった。その後は玄天上帝と地位を等しくし、さらには進んで玄天上帝に代わって海神の最高位を占めるようになったのであろう。

この説は妥当であると考えられる。南宋期においては、媽祖の他、招宝七郎・南海龍王・玄天上帝など南方においては幾つかの海神がおり、媽祖はあくまでその中の一つという位置付けであったと考えられる。清代において、他の海神を圧倒していく存在として媽祖信仰が発展していくのである。

このように、東南アジアの廟の成立については、その信仰の発展の歴史的経緯を背景に持つものが多いのである。こういった経緯については地域差と共に、重要な視点であると考えられる。

結 語

玄天上帝の信仰のあり方は、ハノイ・バンコク・シンガポールを比較しただけでも、かなり異なった特色が見られる。これは玄天上帝の信仰の発展が背景にある。また媽祖や関帝に次いで盛んに祭祀されている状況が分かった。どの地域においても、潮州出身者が中心になって廟を建築しているのが特色である。

このあり方と、日本において妙見信仰に含まれることになった真武信仰とは、相当に発展の経緯は異なったものがあると考えられる。玄天上帝信仰のアジア的展開については、さらに多くの事例を参照し、探っていききたい。